

内戦の中で日本語を学習することの意味

— シリア人日本語学習者のライフストーリーから —

中山亜紀子・妹尾 玲奈¹

(2024年10月9日受理)

Why Did He Study Japanese under the Civil War

— Narrative from a syrian japanese learner —

Akiko Nakayama, Rena Seo¹

Abstract: This article presents a narrative of the Japanese learning history of Assaf, a Syrian refugee who studied Japanese during the civil war. Assaf is a Syrian who was born in Lebanon and is currently enrolled in a graduate school in Tokyo through the Japanese government's JISR program. Due to the educational policies of his parents and the political instability of the situation, Assaf moved several times, changed schools, and gradually became more introverted. After entering university in Lebanon, he began to study Japanese on his own to find "something that was my own". Assaf describes his Japanese studies as a "hobby," but he continued to study for three hours a day, he was searching the Internet for a learning method that suited him. And he passed the N2 test while he was in Lebanon. Assaf's story of self-study illustrates the complex intersection of the different capitals and identities he possessed and provides valuable material for current studies in Japanese language education and second language acquisition about who, why, and how people learn languages.

Key words: Syrian Japanese Learner, JISR Program, Investment for language learning, Independent Study, Language Learning History

キーワード：シリア人日本語学習者、JISR プログラム、言語学習への投資、独学、ライフストーリー

本稿は、2024年1月に提出された第二執筆者妹尾玲奈の卒業論文に、第一執筆者（中山）が編集を加えたものである。

現在、言語学習はインターネットとそれにつづく生成 AI の発達によって、次々に大きな転換点を迎え（青木2016、木村2022など）、誰が、どのように言語を学ぶのか、何のために学ぶのかという大きな問いに直面している。

本稿の研究対象者であるアッサフさんは、シリア人日本語独学者であり、日本に来るまで、内戦などの政

情不安の中で過ごしている。私たちにとっては想像がつかないこのような状況下で、日本語という道具的価値が低い言語に「投資」（ノートン2023）したアッサフさんのストーリーは、資料的価値が高いだけでなく、上述の疑問に答えるヒントを与えてくれるだろう。これが、本稿を共同執筆することにした理由の一つである。

本来ならば、妹尾が筆頭筆者であるべきだが、本雑誌の規定により、大学を離れた妹尾には筆頭になる資格がなく、便宜上、中山が筆頭になっている。

¹ 広島大学教育学部卒業（2023年度）

1. はじめに

21世紀に入ってから、世界的にインターネットとそれに付随する Web メディアが普及したことにより、言語学習の方法は多様化している（青木2016など）。日本語についても例外ではなく、日本語教育機関における教室や指導者に依存しない、いわゆる独学者が注目されるようになった（池田 2016, 得丸2019, 村上 2017, 中井2018など）。

どこにいても日本語学習が可能になったことで、学習方法のみならず日本語を学ぶ動機についても多様化していることが推測されるが、国際交流基金（2023）などの大規模調査では、日本語を独習している学習者は対象者として含まれておらず、日本語独学者が、なぜ、どのような状況で、どんな方法を用いて日本語を学んでいるのか、いくつかの例外を除いて、十分に調査が進んでいるとは言い難い。

本研究への研究協力を依頼したアッサフさんは、シリア難民としてレバノンで生活しながら、インターネットを活用して独学で日本語を学んだ学習者である。アッサフさんへのインタビューを通して、アッサフさんがどうして日本語を学習し、日本語にどのような意味付けをしているのかについて明らかにしたい。

また、レバノンでのアッサフさんの日本語学習状況は「地域内に日本語コミュニティもなく、旅行、留学で日本に行くことも稀で、日本語との接触の少ない海外環境における日本語学習環境」と定義される「孤立環境」（福島・イヴァノヴァ2006）でもある。「孤立環境」における研究として、大西（2014）、根本（2011）、猿田（2023）などがある。

2. 調査

2.1 調査方法

妹尾がアッサフさんのライフストーリー作成を目的として、インタビューを行った。ライフストーリーは語り手の経験や見方の意味を探求することに用いられる方法であり（桜井・小林2005）、アッサフさんが、内戦下でなぜ使う当てのない日本語を勉強したのかを考えるのに適切な方法である。

インタビューは2023年6月22日（53分）に対面で、2023年11月6日（83分）と2023年12月4日（44分）に Zoom 上で計3回行った。インタビューにあたって、事前に本研究の目的と調査方法を説明し、了承を得ている。

インタビューの内容は来日前（日本語学習前と日本語学習以降）と来日後に大きく分かれ、前者では日本

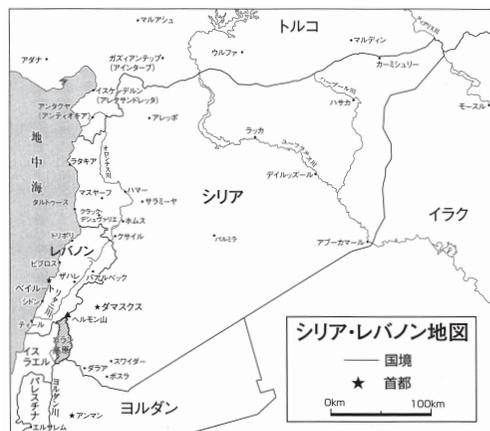


図1 シリア・レバノン周辺の地図（黒木2013, p.8）

語の学習環境やモチベーション、日本語に対する価値観などについて、後者では、来日してからの変化や日本での生活について質問して自由に話してもらった。インタビューは全て日本語で行い、録音・文字起こしを行った。それを時系列に並べ、ライフストーリーを作成した。出来上がったストーリーはアッサフさんに内容の確認を依頼するとともに、ストーリー作成時に不明な事柄については、SNSなどで質問を行った。

2.2 研究対象者

研究対象者のアッサフさん（実名希望）は現在東京にある大学院に通う20代の男性で、電子工学を専門としている。レバノン生まれのシリア人で、シリア在住時代に内戦が始まったためレバノンに難民として避難した。高校のときに日本のアニメや音楽と出会い、大学時代にインターネットを活用して独学で日本語を学習し、日本語能力試験 N2 レベルを身につけた。そして2022年度の JISR プログラム¹に参加して来日。広島大学での日本語学習プログラムを経て、日本語能力試験 N1 を取得した。

妹尾は JISR プログラムの日本語チューターとして参加し、2022年の5月から7月までアッサフさんに日本語の授業を行った。

3. アッサフさんのライフストーリー

3.1 幼少期からの教育環境

アッサフさんはレバノンのトリポリという町で生まれた。家族構成は両親、2人の弟と2人の妹である。母親は教師で父親は大学卒であることから、両親は教育に力を入れており、アッサフさんがより良い教育を受けられるよう努めていた。

お母さんは教師なんですよ。お父さんは12人兄弟です。彼だけが大学に入ったんです。彼は大学に入った時、家族みんな猛反対でした。なんで5年間を捨てて勉強するんかい、みたいな感じ。今から仕事をしたら、もっとお金を稼ぐみたいな。そういう反対を受けた。それなのに頑張って卒業できたんです。やはり両親はそんなに教育を大事にしました。 (第1回インタビュー)

また、アッサフさんは4歳のときから子供向けの英語の曲やアニメに興味を持ち、少しずつ英語が分かるようになった。そして、町の中でも英語で有名な小学校に入学した。ここでアメリカ出身レバノン人の友人ができる。2001年のアメリカ同時多発テロ事件によって、アメリカでの生活が難しくなったレバノン人が帰国し、その子どもたちがアッサフさんの小学校に通うようになったのである。その子どもたちとアッサフさんは偶然同じアニメを見ていたため、他の子どもよりは友達が作りやすかった。

両親はレバノン人で、多分、レバノン育ちなんですけど、お父さんがみんなもう100パーセントアメリカ人で話し方もなんか立ち振る舞いとか。僕はなんか、あんまり友達が簡単にできる人ではなかったんですけど、早く友達になって、英語で喋れる相手はできました。 (第1回インタビュー)

それに伴って英語力が向上した。

みんなが一応アメリカ人なので、英語しか喋れないんですよ、最初は。もちろん英語で喋るしかないんですけど、それは、僕が8歳、9歳の時です。それをきっかけに英語力がだんだん上がりました。 (第2回インタビュー)

アッサフさんが小学5年生のとき当時のレバノンの首相が暗殺される事件²により、シリア人であるアッサフさんたちはレバノンに住みにくくなり、シリアに引っ越した。

(首相を暗殺した)レバノンの人が、シリアという国に潜入したんですけど、代わりに、レバノン在住のシリア人にも、なんか、虐待しました。(それで、)みんなでシリアに行きました。あの時は、2006年でした。僕は10歳でした。 (第1回インタビュー)

アッサフさんにとって、シリアにいたこの時期は、「一番楽しかった時期」だった。

些細なことばかりですが。友達が何人もいてよく一緒に遊ばれて、シリアにいる家族か親戚のみならずと仲が良く一緒にいるのが楽しかったとか、ただどこかまで行って町並みを見ることとか、そういうことで楽しかったです。(SNSによる回答)

アッサフさんは、小学校から高校まで、内戦の影響も含めて計6つの学校を経験した。シリアの小学校と中学校でも母親の意向により2回転校した。その中には、宗派の異なる学校もあった。

僕の場合は、友達になってくれる人はいなかったんですけど、それ以外は、大丈夫ですけど。弟が、割と、ひどかったです、扱いは。(第2回インタビュー)

そして、アッサフさんが中学3年生のときに内戦が始まった³。当時住んでいたホムスは、政府軍と「反対軍」の真中にあり内戦が始まった当初から厳しい状況になった。そのため、中学校最後の日にレバノンへ引っ越した。

いきなり両親が学校の前(に)現れて、車に入っていたいな感じでした。今どこに行く、あ、レバノン、あ、そっか、みたいになりました。(第1回インタビュー)

レバノンに戻って入った高校は治安の悪い場所にあった。

レバノンはすごく治安が悪いところ。(中略)レバノンでは、外で遊んだりできるんですけど、ちょっと難しいです。家の周りには、(外で遊んだり)あんまりできないんですよ。どっかの公園に行かないと。いろんな良くない人がそこ(公園)にもいますから、ちょっと危ないです。(中略)汚い言葉で叫んだりする人とか、ナンバシに来た人とか。悪い雰囲気を作ってしまうですよ。(第2回インタビュー)

また、将来に希望を持ってなくなり、自分のやりたいことが考えられなくなった。

多分、シリア内戦が強い影響でしたけど、本当に

将来のことが考えなくなったんです。高校1年からぐらいいは。将来、何年前（先）のことよりは、来週とか、来月までのことを考えるみたいな感じでした。（第3回インタビュー）

そのうえ、不景気の影響もあり、レバノンで働くというイメージが持てず、将来の事よりも今、現在のことを考えるほか無かった。

レバノンがすごく不景気な方で、仕事あんまりできないので（中略）どこに働くのかはまだわからない。そもそも、働くことができるのかまだわからないから全然、将来のことは考えなかったんです。（第3回インタビュー）

また、高校1年が終わった時、「もっといい学校に両親に入れられた」。このように、環境が変わることでアッサフさんの「友達ができないタイプ」の性格は「悪化」し、人間関係の構築が難しくなるほどに内向的になった。アッサフさんは高校3年生まで学校では全く話さなくなった。

紛争が起きてレバノンに戻ったんですけど、あの時期は、もう、すごく辛くて、全然、口が利かなく（利けなく）なってしまいました。（第2回インタビュー）

このころ、アッサフさんは難民として申請し、登録されている。

僕がレバノンに来て、高校1年で、高校2年の時は、難民として登録されました。自分で申請するんですね。（第2回インタビュー）

さらに、高校では勉強しても成績が伸びず、勉強が嫌になった。そのとき、父親がサウジアラビアでの仕事を見つけたためアッサフさんも一緒に付き、1年間サウジアラビアで過ごした。

サウジアラビアはただ、静かでした。すごく暑いから、いろんな、屋内の施設がありますよね。デパートもすごく充実したんです。弟が、4歳ぐらいでしたから、弟をどこかに連れて遊ばせたのは、楽しかったので、サウジアラビアが好きでした。（第2回インタビュー）

サウジアラビアの大学への進学も考えたが、そこで

も差別はあり難しいと感じていた。同じときに、母方の祖父が亡くなった。アッサフさんは祖母の面倒を見るため一緒に住むことになり、レバノンに戻るようになった。大学では、英文を専攻することも考えたが、叔母の激しい反対に遭い、電子工学を専攻することにして、家から近いところに通った。

子供の頃からよくパソコンをいじったりしてたんですから。あ応募した大学の中に、電子とコンピューター、工学みたいなプログラムがあったんですから、ちょっと、かっこいいのかなと思った。（第1回インタビュー）

3.2 日本語との出会い

高校のときに日本のアニメにハマった。レバノンでも日本のアニメを見る人は「割と」おり、アッサフさんもそのうちの1人だった。日本語に対して「響きがいい」と感じていたが、当時は言語というよりアニメそのものに興味を持っていた。

僕は高校の時日本のアニメにはまったんですよ。あれをきっかけに日本語を聞く機会があったんです。聞けば聞くほどなんかいい言語だなと思って。まあ、響きとしては。でも、あの時は言語というよりは、ただ目の前にあるアニメが好きでした。（第2回インタビュー）

さらに、日本の同人音楽⁴と出会い、その歌詞の意味を調べようとした。歌詞を翻訳機能にかけたが、意味がおかしくて理解はできなかった。ただ、翻訳したときに出了た日本語の読み方に興味を持った。

Google 翻訳に入れてみようって、もちろん、意味がおかしくなっちゃいますけど漢字の読み、ローマ字と、平仮名のローマ字をも見えるんですよ。翻訳したら。きっかけに、なんか気になったんですよ。（第2回インタビュー）

3.3 「自分だけのもの」を得るために始めた日本語学習

アッサフさんは幼少期から英語が「自分のもの」だと感じており、「高校のときは、英語が1番得意で有名」なほどだった。しかし大学に入って、「自分だけのものがない」と感じるようになった。自分と同じくらい英語が話せる人や、他に強みを持っている人と比べて、自分が劣っていると思うようになった。

英語だけでなく、点数がいいとか、数学が上手い人とか。他の分野では、僕よりは上手かったんです。それはちょっと悔しかったです。(中略) 専門分野の人もいますし、普通に運動とかそういう、何か劣ってるのかなとは感じたのは、それはちょっと嫌でした。(第1回インタビュー)

自分だけの「特別なもの」が欲しいと思ったアッサフさんは、高校のときに聞いて「響きがいい」と感じていた日本語を習得することに決めた。中東では日本語を話せる人が「滅多にいない」ため、日本語を話せるようになったら自分に自信が持てるのではないかと考えた。

大学でも、英語は比較的の高いレベルでしたよね。周りの人に比べると。それでも、そういう、自分の強みと思ったことは、別にそれほど強みではない、自分の特別なものがないという感じがしてしまいました。だから、新しい言語を勉強すれば、新しい言語を話せるようになったら、自分的には、なんか自信が持てるようになるんですから。(中略) レバノンでは、というよりは、アラブ諸国の中で、日本語を喋れる人は滅多にいないので。(第2回インタビュー)

3.4 日本語学習方法と継続のための工夫

日本語の響きや読み方が気になっていたアッサフさんは、大学1年生のときに、発音を覚えてひらがなを書き始めた。勉強し始めた当初は、あまりうまく覚えられなかった。

実は最初は、日本語を勉強したいという意思が強かったんですけど、色々やってみたんですが、あんまり頭に残らなかったんですね。ただ言葉を見て覚えようとしたけど、何かが違うと感じて。たくさん(学習方法を)調べたんですよ、Googleで。(第2回インタビュー)

日本語を本格的に学習しようと思ったアッサフさんは、英語を使って、学習方法をインターネットで調べた。クラッシュエンのインプット仮説や横須賀の米軍基地での日本語学習方法などが特に気に入り、それに従って学習を進めた。その中で、「20歳超えると、言語学習をしてもネイティブレベルには、永遠にならない」と言っている動画を見て、「上等だ⁵みたいに、な」った。アッサフさんは、「子供みたいに、言語を習おうと決め」、日本語の本やアニメをインターネッ

トで探して、学習のための資料として用いるようになった。

最初(は)、読んだものは、3歳児向けの絵本で、少しずつ子供向けの漫画とか、少年マガジン風の漫画で(や)、ライトノベルで、その後は、小説、だんだん、ちょっと、レベルはあげたりしたんです。見ることもそうでした、最初は調べたんですよ。子供向けのアニメとか、そういうの。子ども向けじゃないんですけど、そんなに難しい単語が多くないアニメを探して見ました。(第1回インタビュー)

そして、大学2年生のときから、毎日3時間の日本語の勉強を続けた。

毎日の勉強でしたけど、別に、そんなに、厳しくはないでした。大学の授業をサボりたい時は、日本語学習に行っただけです。3時間が全部、ただのつまらない勉強というよりは、1時間ぐらい、教科書風な勉強を、いろんな単語を暗記して、復習して、文法勉強とか。で、1時間ぐらいは、何かを読んだりして、1時間は、何かを見たりしたんです。(第1回インタビュー)

日本語学習は大学の勉強からの逃げ場でもあった。

最初から趣味でしたよね。ときどきサボってしまいますよね、大学の勉強でも。僕の場合は、サボりたい時は日本語の勉強になります。今、振り返ってみても、面白い。日本語が上手になった理由は、学校の勉強、さぼったからです。(第2回インタビュー)

毎日続ける中で「飽きたという感情は、時々は感じた」が、学習が断たれることを恐れていた。

ちょっと怖いですよ。(中略) 日本語の勉強をやめたら、本当に、何か月後はいろんなこと忘れてしまうのかなと思いました。忘れたくないですし、僕の努力を無駄にしたくなかったです。(第2回インタビュー)

アッサフさんの最終目標は、「日本語のネイティブ並みに話せることで」、「文法が正しいだけじゃないんですけど、発音も日本人っぽいなということ」を目指している。しかし、学習を継続するために、学習段階で

の目標を設定し、それを達成しながら学習を進めた。

これは日本語だけじゃないんですけど、何かを習う時は大きい目標もあるんですけど、小さい目標も作ります。最初は初級レベルの子供向けの絵本。最初はこれを理解できればそれでいいみたいな感じですよ。理解できるレベルになったら、じゃあ上の方に進みましょう。やはり目標が大きかったら、着くまではすごく時間がかかって、くじいて（くじけて）しまいますから、大きい目標を小さくすれば、進捗を感じる、進むことができます。（第2回インタビュー）

3.5 JISR プログラムへの参加

日本語学習開始から約1年半が経ち、大学3年生のときに UNHCR から JISR プログラム募集のメッセージが届いた。JICA のサイトの募集要項に目を通してみると、日本でのプログラムの応募者にピッタリなのは「まさに僕です」と思い応募した。しかし、残念ながら不合格となった。

その原因として、自分の専門である工学ではなく、平和に関する研究で応募したからではないかとアッサフさんは考えている。平和学で応募したのは、電子工学の勉強は楽しかったが、難しかったことに加えて、紛争が終わった後のことを考えたかったからだ。しかし、面接では十分にアピールできなかった。

やはり僕だけじゃないんじゃないかと、いろんな人も同じプログラムに応募してるんですから、前が全然関係ない勉強し（てい）たら、あんまり自分をアピールできないんですよ。話して面接官が、ただ僕を信じてくれなかったかもしれない。（第2回インタビュー）

プログラムに落ちたことで、卒業後の進路について考える必要があった。しかし、当時、バイルートでの爆発やハイパーインフレにより、就職活動は上手くいっていなかった。

特にレバノンでは、シリア人は仕事が決まってるんですよ。大体、シリア人でしたら重労働しかない、みたいな感じですよ。僕はできればパソコンに関わる仕事をしたかったですから（が）、あんまりできなかったんです。（第1回インタビュー）

しかし、コロナウイルスの流行によってオンラインでの仕事が求められるようになり、アッサフさんはバ

ソコンのスキルを活かして、レバノンで小学校の数学の教師をしている叔母の手伝いをするようになった。口コミで他の教師たちのオンライン授業の動画作成などの手伝いもした。また英語が上手な人が少ないレバノンで、英語を得意とするアッサフさんは英語に関する仕事もできた。

JISR プログラムに落ちた1年間は、このようなオンラインでできる仕事をしながら、認知症の祖母の面倒を見ていた。そして、次の年は、卒業研究の担当教授の勧めにより、卒業研究の続きとして工学の研究をすることにして、JISR プログラムに再び応募した。そのときは、JISR プログラムだけでなく、リトアニアの TESOL (Teaching English to Speakers of Other Languages) プログラムにも応募していたが、無事に JISR プログラムに合格し、東京のある大学院での研究前に、広島大学で8か月の日本語研修を受けることになった。

もしリトアニアだったらリトアニアで、就職する感じになる。できれば、あの時も、日本の方が就職したかったです。日本には就職したかった理由は多分、日本語ですね。就職内容の場合はどこでも、いい会社や自分に合う就職内容があるんですけど。（第2回インタビュー）

アッサフさんの日本語学習の動機や目標が日本に行くことではなかった。なぜなら、シリア国籍でレバノンに住んでいるアッサフさんにとって、日本に行くことは「夢のような話」であったからだ。

日本語を勉強した時は日本語に惹かれました。日本語を勉強した時は、別に、働きたくないというわけじゃないんですけど、旅行だけでいい。日本には、いつか行きたいという思いがあったんですけど、それは自分にとってはほぼあり得ないことでした。行ける国が割と限られてるので、夢のような話でした。（第2回インタビュー）

3.6 ヒロシマと「自分たちの国」

いつかはネイティブレベルに日本語が話せるようになりたいと思っていたアッサフさんだったが、来日が決定したときに「ただの自己満足のため」に、日本語能力試験 N1 を目指そうと決めた。そこで広島大学での日本語研修コースでは、担当の先生に相談して、N1合格に向けての授業や、コースとは別の留学生向けの授業に参加することができた。

また、日本語研修コースでは平和学習の時間も設け

られており、広島がどのような歴史を築いてきたのかを学ぶものだった。

プログラムの中に平和公園にも、連れて（訪れた）んですよね。平和資料館にも、入れたんですけど、100パーセント壊れた街でも、最初から建てられたということが、自分たちの、今のすごくひどい状況の国でも、最初からもう1回建てられる、教えてくれるためでした。（第2回インタビュー）

「自分たちの」国について、シリア難民のアッサフさんはシリアに帰ることは内戦の状況的に厳しく、レバノンの在留カードも切れてしまって簡単に帰れる状況ではない。そもそもレバノンでシリア人は迫害されており、レバノンでは「シリア人でないように振る舞う」と述べるほどである。

レバノンでは、シリア人に対する扱いはすごくひどいです。（第2回インタビュー）

一方、日本に対しては、治安の良さやルールが遵守されている点で住みやすさを感じており、現在は日本で就職活動を行っている。

全部を通して、本当、日本に来て良かったと思います。日本はですね、治安がすごくいいですし、人とは話しやすいですね。日本人というよりは店員さんとか市役所の人とか、何か問題があったら、大体、行ける人はいつもいます。すごく大事だと思います。みんなが、ちゃんと、ルールを守ってるのは、すごく、ありがたいです。心配りの国だと、よく思います。（中略）本当に、住みやすいと思って、できればここに、卒業しても、ここに住みたいと決めました。（第2回インタビュー）

3.7 来日してからの自身と日本語の変化

来日してからも、他人と比べて内向的ではあるものの、日本語だと人に話しかけやすくなった。来日前から「日本語が理解できるレベル」だったが、日本語を話す機会は無かった。しかし広島に来てから、日本語レベルの高くない他の留学生たちを手伝うために、日本人に日本語で話しかける必要があった。それが「人と話す自信」につながったと考えている。さらにその結果、日本語で話すことが増えたため、「日本語が話せるようになった」とよく感じるという。

レバノンにいた時の日本語の勉強だからなのかわかんないんですけど、その、やはりまだなんか内向的な方なんですけど、人に話しかけやすくなったと思います。（話しかけやすいのは）日本語と英語で、アラビア語は人によります。（中略）まあ、多分、自信が持てるようになったかもしれません。（第3回インタビュー）

一方、日本人と日本語で話す機会が増えたことで、「自分だけのもの」だった日本語は変化があったのだろうか。レバノンとは違い、日本語に溢れている日本では「特別なもの」という感じは少なくなった。しかし、日本語に対する見方に変化は感じないと述べている。アッサフさんにとって、日本語は「好き」なもので「面白い」ものであることに変わりはない。

特別なものというのは、多分、減った方だと思います。結局まあ、みんな日本人ですから、みんな日本語が話せるんですよ。特に僕の大学なんですけど、外国人の5割ぐらい日本語が流暢な方ですね。日本語に対しての見方が変わったとは別に思いません。（第3回インタビュー）

東京に住んでからも、日本語を使って人と話したいという気持ちがあり、大学院では農業のサークルに参加した。そこでは日本人の部員だけでなく農家の人との交流もでき、留学生のサポートに協力的な農家の人と留学生を繋げる役割を担ったこともあった。

地元の農家さんとの関わりも多くなって（中略）いろんなこともできたりしてるんですけど、例えば、留学生のお手伝い（し）たい農家さん（と）も知り合って、その農家さんが毛布とか枕とかベッドとか全部、何か必要だったらあげられると言って、いきなり僕が留学生とその農家さんの繋げる役になった時もあります。（第3回インタビュー）

大学院進学や就職活動を通して、自分の将来について考えるようになった。今もまだ、明確に「これがやりたい、という思いがない」けれども、「普通に」就職をして、いつかは結婚をして家庭を作りたいという希望が芽生えている。アッサフさんは日本での就職活動を通して、自分自身と、自分の将来と向き合っている途中である。

4. 考察

以上、アッサフさんのライフストーリーを紹介した。なぜ、経済的な価値を持たない日本語学習にアッサフさんは投資したのだろうか。アッサフさんの日本語学習は、気晴らしや現実逃避のための余暇活動と解釈するには、あまりにも慎重さや綿密さが感じられる。何より、アッサフさんが学習を継続したのは、日本語学習が楽しかったからではない。日本語学習は余暇の「消費」(久保田 2015)の対象ではなく、努力の対象であり、つぎ込んだ努力が「無駄」になることを恐れて学習を止めることをしなかったのである。

アッサフさんにとっての日本語は、内向的な自分や難しい大学の勉強を一旦置いて、没頭できるもの、努力を積み重ねて「結晶」を作るようなものであり、アッサフさんが自信を持つためにその結晶が必要だったのではないだろうか。アッサフさんの努力によってできた日本語という「結晶」の価値は、「孤立環境」であるシリア・レバノンの環境であるからこそ、余計に「特別なもの」となった。一般的には、現地で日本語が必要とされてないことは学習の困難につながると考えられるが、アッサフさんは、日本語を話せる人が「滅多にいない」環境だからこそ、「日本語が話せたら自信が持てる」と考えたのである。

アッサフさん同様、経済的価値のあまりない状況で日本語を学ぶ理由について、先行研究では、「よりよい自分」(根本 2011)や「別の自分」(山元 2017)を見出したなどと表現されている。市嶋 (2019) では、難民としてスウェーデンに渡ったシリア出身の日本語学習者が、日本語学習を継続した理由のひとつが「一人の人間として認めてもらうため」であると述べている。「ステレオタイプの難民」としてみなされ、差別をされることもあった学習者が「固有性を持ったひとりの人間」として認められるために学習を続けたのである。また、市嶋 (2020) では、シリア内戦下の過酷な状況下で、(元)日本語教師たちは「不安や悲しみを和らげる「生きがいのある日常をつくる媒体」として、「新しい自分」を作るものとして、日本語と向き合っていた。

「孤立環境」において、日本語の珍しさや難しさから関心や挑戦志向を持つ学習者が少なくないことは、大西 (2014)、石橋 (2018) によって報告されている。しかし、それだけで学習を継続することは困難であり、日本語を活用して就職を目指すことや、日本人留学生との交流によって動機づけられることで学習を継続した例が見られる。このような機会がなかったアッサフさんが日本語の学習を続けたことから、日本語を習得

して「特別なもの」を得たいというアッサフさんの強い気持ちを押し量ることができる。

しかし、アッサフさんは、日本語という「特別なもの」を得てどうしたいのかを考えることはできなかった。例えば、日本語学習の最終的なゴールである「日本語のネイティブ並みに話せること」も、その理由については「強いて言えば、完璧主義者」だからと答えている。学習の計画を細かく立てていたアッサフさんが、将来の計画に関して述べなかったのは、内戦によって将来への「希望」が持てなくなったからではないだろうか。将来のことを考えても「実現できない」と感じるからだ。実際に、アッサフさんが将来について考え始めたのは日本に来てからで、現在も自分の将来に現実味を感じていないようだった。今後、アッサフさんが就職活動や日本での生活を通して自分と向き合っていく中で、日本語に対する意識も変化していくと考えられる。

5. おわりに

本稿では、アッサフさんのライフストーリーを紹介し、若干の考察を行った。なぜ日本語を学習するのか、それをどう活かそうと考えるのかは、学習者一人ひとり異なるものである。このような個々の学びを明らかにすることは、新たな事例を提示することになり、多様な学習者の理解への一歩となるだろう。困難な状況下でも、日本語学習に価値を見出し、学んでいる学習者のことを忘れず、安全に安心して勉強できる環境になることを心から祈っている。

【謝辞】

研究に協力してくださったアッサフさんに心より感謝申し上げます。

【注】

- 1) JISR プログラムとは、JICA の「シリア平和への架け橋・人材育成プログラム (Japanese Initiative for the future of Syrian Refugees)」の略称で、ヨルダン、レバノンに難民として滞在している、22歳から39歳までの大学卒業資格を持ったシリア人を対象に行われる修士課程のプログラムである。大学院への進学に先立ち、8か月日本語を含む、予備教育を受ける。2017年から5年間の受け入れ実績は、73名である。(JICA)
- 2) 首都ベイルートで爆発が発生し、レバノン元首相

- ラフィーク・ハリリー氏を含む22人が死亡した暗殺事件。2005年9月に元治安当局者4人が逮捕され、彼らが親シリア派と報道された。事件の真相解明のため、2007年に安全保障理事会によってレバノン特別法廷が設立され、日本も2008年に100万ドルの支援を行うことを表明している。外務省によると、事件以来、米仏による対シリア圧力が強まり、シリアは国際社会において孤立。一方、レバノンでは、親シリア・イラン派（イスラム教シリア派のヒズボラーなど）と、反シリア派（ハリリー元首相次男のサアド・ハリリー氏を中心とする親サウジ・イスラム教スンニ派のグループなど）が対立してきた。（外務省シリア・アラブ共和国）
- 3) シリアは共和政体下にあるものの実質はバアス党による一党支配であった。2011年3月中旬以降、各地で反政府デモが発生し、反政府勢力に過激派武装勢力なども参加してシリア政府当局との間で暴力的衝突に発展した。（黒木ほか2013）
- 4) 創作音楽、自主制作音楽のこと。
- 5) 「やってやろう」、「ますますやる気になった」という意味。

【引用文献】

- 青木直子 (2016). 「21世紀の言語教育－拡大する地平、ぼやける境界、新たな可能性」『JOURNAL CAJLE』17, 1-22.
- 池田雅美 (2016). 「独学可能な時代－多様化する日本語学習歴と授業活動への影響」『CAJLE ANNUAL CONFERENCE PROCEEDINGS』70-79.
- 石橋美香 (2018). 「孤立環境における日本語学習者の動機づけ－ベラルーシ人学習者の事例から」『言語教育研究』第9号, 13-23.
- 市嶋典子 (2019). 「シリア出身の日本語学習者の日本語に関する意識とシティズンシップの動態」『言語文化教育研究』17, 71-87.
- 市嶋典子 (2020). 「外国語の学びとアイデンティティ－シリアの日本語学習者による語りをしてがかりに」『複言語・多言語教育研究』日本外国語教育推進機構会誌 8, 39-54.
- 大西由美 (2014). 「日本語学習者の動機づけに関する縦断的研究：日本語接触機会が少ない環境の学習者を対象に」『北海道大学 博士（学術）甲第11425号』外務省 報道発表「ハリリー元レバノン首相暗殺事件に係わるレバノン特別法廷支援について」[HTTPS://WWW.MOFA.GO.JP/MOFAJ/PRESS/RELEASE/H20/6/1181024_910.HTML](https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/release/h20/6/1181024_910.html)（最終閲覧

- 日2023年12月23日）
外務省「シリア・アラブ共和国」
[HTTPS://WWW.MOFA.GO.JP/MOFAJ/AREA/SYRIA/DATA.HTML](https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/syria/data.html)（最終閲覧日2024年9月25日）
木村護郎クリストフ (2022). 「異言語間コミュニケーションの一方略としての機械翻訳」『ことばと社会』24, 18-36.
- 黒木英充編著 (2013). 『シリア・レバノンを知るための64章』明石書店
- 久保田竜子 (2015). 『グローバル化社会と言語教育－クリティカルな視点から』くろしお出版
- 国際交流基金 (2023) 『2021年度海外日本語教育機関調査』（最終閲覧日2024年9月25日）
[HTTPS://WWW.JPFF.GO.JP/J/PROJECT/JAPANESE/SURVEY/RESULT/DL/SURVEY2021/ALL.PDF](https://www.jpff.go.jp/j/project/japanese/survey/result/dl/survey2021/all.pdf)
- 桜井厚・小林多寿子 (2005). 『ライフストーリー・インタビュー質的研究入門』せりか書房
- 猿田静木 (2023). 「孤立環境における日本語学習動機・学習困難度－フィンランド人日本語学習者を対象に」『日本語教育』185, 46-61.
- JICA シリア平和への架け橋・人材育成プログラム
[HTTPS://WWW.JICA.GO.JP/RESOURCE/SYRIA/OFFICE/OTHERS/JISR/KU57PQ0002IRKUK-ATT/JISR_INTERNSHIP.PDF](https://www.jica.go.jp/resource/syria/office/others/jisr/ku57pq0002irkuk-att/jisr_internship.pdf)（最終閲覧日2024年9月25日）
- 得丸智子 (2019). 「日本語独習者の研究－アニメ視聴から始まった日本語学習」『開智国際大学紀要』18, 37-56.
- 中井好男 (2018). 「ニコニコ動画を持つバーチャルなセルフアクセスラーニングスペースとしての機能に関する考察－香港出身の日本語学習者の言語学習史をもとに」『STUDIES IN SELF-ACCESS LEARNING JOURNAL』9(2), 179-195.
- 根本愛子 (2011). 「カタールにおける日本語学習動機に関する一考察－LTI 日本語講座修了者へのインタビュー調査から」『一橋大学国際教育センター紀要』2, 85-96.
- ボニー・ノートン (2023). 『アイデンティティと言語学習－ジェンダー・エスニシティ・教育をめぐる広がる地平』中山亜紀子, 福永淳, 米本和弘訳 明石書店
- 福島青史・イヴァノヴァ マリーナ (2006). 「孤立環境における日本語教育の社会文脈化の試み－ウズベキスタン・日本人材開発センターを例として」『国際交流基金 日本語教育紀要』2, 49-64.
- 村上吉文 (2017) 『むらログ2017: 冒険と多様性』

AMAZON KINDLE BOOK
山元淑乃 (2017). 「アニメ視聴を契機とした日本語習
得を通じた発話キャラクターの獲得過程に関する事例

研究－フランス移民二世 C の語りの質的分析から」
『言語文化教育研究』 15, 129-152.